

魔 風 性 奴

# ウナンデディア

壱状什

表紙イラスト：秋月からオ



二次元ぷち文庫

試し読み版

当ファイルは、モバイル二次元ドリームにて配信された  
『魔風性奴ウィンディア』  
に基づいて作成しております。

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。



魔 風 性 奴

# ヴァンデリア

壱 状 什

表紙／秋月からす

二次元ぷち文庫

## 登場人物紹介

### Characters

みづき ゆうな まふうせんし  
**観月 優奈／魔風戦士ウィンディア**

地球の病・思念怪物イメージアと戦う戦士の一人。アルバイトで明の家庭教師をしている。

明朗快活で母性的な性格の G カップ美少女。他にも明には秘めたものを持っている……。

もがみ あきら

**最上 明**

優奈の教え子。幼いころに母を亡くしており、父とも互いに距離を取っている。素直で少々甘えん坊、そして早熟なために優奈に恋心を抱いている。

薄明かりの灯るホテルの一室。一人の少女が四つん這いになって貫かれていた。

たわわに実った尻肉を掲げ、屈服の姿勢で大きな喘ぎを繰り返す。艶やかな黒髪から連想させる清楚さは、獣欲の色に塗りつぶされていた。

「んおつ、ふあつ、ああおお……おんっ、んぐうっ！」

ばちゅん、ばちゅんっ！

獣の恰好で、獣よりも浅ましく。背後からのし掛かる男が腰を打ちつけるたび、豊かな乳房が別々の生き物のように弾む。情欲の色に染まった肌から汗が飛び散って光った。

陵辱者が耳元で囁く。ささや

「もっと鳴いてくれ。昼間からアヌスを犯されて感じる、浅ましい声を聞かせてくれ」

肉棒が埋まっているのは蜜壺ではなく、皺の伸びきった菊門だ。そんなところで交わっているのに、はしたなく喘ぐ自分の姿に少女は狂乱する。

「ひあつ、もおつ、ゆるひてえっ！ あき、とひい……さあんっ」

ポリュームのある双臀をがっちりとホルドされ、何度も奥まで抉られる。たまらず上げた悲鳴には甘い喜悦の色が混じり、自分から腰を振ってさらなる結合を求めてしまう。

「ああっ、私もイクぞ、君の中に、出す……っ」

「ふあひいつ、きて、くださいっ！ わたひもおつ、イクっ、イクううっ！」

男の宣言と共に、亀頭が膨張して敏感に馴染けられた穴を拡張する。少女は教え込まれた

通りに自らの絶頂を告げ、褒美の精液を流し込まれる。

どぷっ、びゅくるる……っ！　ぷしやあああっ！

「んあっ、ふあっ、ひにやあ……おひり、いっぱいい……あついの、しみりゅう……っ」

男が小さく呻き震えるたびに、少女はそれ以上に悶えてうつとりと蕩ける。注ぎ込まれるたびに腰を揺すって受け止め、緩んだ秘唇から淫蜜をしぶかせる。

一度や二度の経験ではない。肛虐で快楽を貪ることに慣れた女の反応だった。

じゅぷ、ずりゅ……っ。

「ひっ、んほお……っ！」

結合を解かれて排泄の感覚を強制的に維持させられる。脱力してシートにしがみつくように沈む彼女を見つめ、男は優しく髪を梳いた。

男の年の頃は四十前後、若い頃は美青年で通用したであろう整った顔と、たるみを知らないかのように引き締まった体も、情交に火照り汗ばんでいる。

身を横たえて、男は少女の肌に指を這わせた。セックスの後の丁寧な後戯を欠かさないのは、牝としての気配りだ。自ら調教し牝として仕上げた女ならなおさらだ。

「……ああ。やはり、君は覚えがいい。君がいてくれて、よかった」

「んふう……奥さまにも同じこと、いったんでしょお……？」

少女は満ち足りた表情で甘えてくる。男はその声音に、彼女の寂しさを感じ取る。

「そんな意地の悪いことをいう子は、念入りに躑ねねばならんな」

「ふあああん　もお、いじめちゃやだ……んむう」

男は拗ねる恋人の唇を吸い、肉感的な両脚を抱えてのし掛かる。時計をちらりと窺うと、まだ愛し合う時間は残っていた。

ベッドサイドに置かれた、羽根ペンとタクトがそんな二人を見ていた。

慣れ親しんだ街並みと同じ形ながら、色彩の明度が極端に低く住人の気配が全くしない。  
ゆめどの夢殿学園初等部四年の最上明はそんな異空間の一角で、塀を背にして最大のピンチに陥っていた。

『どうした、もう逃げないのか小童？』

「う、うわ、うわわわわわ……っ！　この、外れろ、外れろっ！」

茜色から虹色に変わった空の下、尻餅をついた少年の目の前には異形の怪物がいる。大型トラック並の体躯をそびえさせ、人語をわんわんと反響させる巨大な蜘蛛だ。

T字路の突き当たりだ。逃げ場所は左右にあるが、足首に巻きついた糸が地面に食い込んでいて動けない。掴んで引きはがそうとしたがびくともせず、掌には血が滲んだ。

『ならばそろそろ喰い時か。小童を喰うて儂は完全なる肉体を……』

蜘蛛がにじり寄る。アスファルトに爪を突き立て、子供の腕ほどもある太さの触肢を蠢

かせ、涎を垂らして少年を捕食しようと迫る。無数の赤い目がギラギラと輝いていた。

「やめてよ！ 僕おいしくないよ！ えーと、あとは、あとは……このお！」

『手に入れるのだアッ！』

もがきながら何とか外したランドセルを蜘蛛めがけて投げつける。蜘蛛の牙はいともたやすくランドセルを貫き、放り捨てた。自分の未来を見せつけられて少年はへたり込む。

「う、うう……っ！」

学校に教科書を忘れたことに気付いて取りに引き返したのが、まさかこんな事態を招くとは思っていなかった。学校を出たところで空の色が変わり、独りぼっちで大蜘蛛に追いかけられるなんて、予測できるはずもなかった。

「いやだ、死にたくないよ……助けて、先生、母さん！ ……誰かあああつ！」

家庭教師に、天国の母に、そして見知らぬ誰かに助けを求める。牙という形で死が迫る。たまらず明が悲鳴を上げた瞬間。

「てええいやあつ！」

『ぬお!?!』

横殴りの衝撃が蜘蛛の体が浮き上がらせる。巨体は横転して住宅の塀にめり込んだ。

「うわっ！」

明は思わず目をつむり、自分の身をかばう。



土埃はやがて晴れる。恐る恐る目を開けた少年の前に一人の少女が降り立っていた。

「大丈夫？ 明くん、怪我はない？」

「え……せん、せえ……っ？」

最初に目に入ったのは夢殿学園高等部の女子制服だ。グリーンのブレザーと二年生であることを表す紺のネクタイを、Gカップの豊果が内側から押し上げている。

無防備に屈み込んで心配してくる少女の胸元から目をそらすと、今度は捲れ上がったスカートの目に入った。健康的に引き締まりながらも肉感的なボリウムに満ちた太腿がまぶしくて、慌てて今度は視線を上げる。

長い黒髪が一見楚々とした印象を与えるが、やや垂れ目がちの大きな双眸にちよつと丸い鼻とぷっくりとした唇が組み合わさってむしろ年齢よりも幼く見える。明にとっては親しい顔が、安心させるように微笑んでいた。

「け、怪我はないですっ。でも、何で先生がつ？」

「え。それは……ほら、今日は家庭教師の日だから！ ちよつとだけ早く着いちゃって……と、とにかく早く逃げてっ！」

「逃げてっていわれても……」

どこか取り繕うように説明した少女が、明に背を向けて蜘蛛の怪物に向き直る。翻るスカートの奥で白いショーツとむちつとした尻肉が覗いた。

『くっ、おのれ！ この力、この気配はッ！』

優奈は扉にめり込んでもがく大蜘蛛を見つめ、羽根ペンを掲げた。

「セイントドロワーよ、私に力を——ウィンディア・スパーク！」

少女の叫びに応じて、羽根ペンに埋め込まれた宝石から光が溢れ出す。全身を包み込む光の中で制服を構成する分子組成がほどこけ、91・58・89の起伏に富んだ肢体が露わになった。風が吹き荒れ、腰まで届く黒髪がなびき、鮮やかな紅色へと変わっていく。官能的な曲線をダークグリーンのレオタードが包み込み、腰の周囲を一周する小さな霊石群からシースルーのミニスカートが広がった。

両手足にはレオタードと同じ色調のロンググローブとブーツが装着され、白いマントが風にはためく。最後にシンプルなティアアラが頭部を飾り、少女は戦士へと姿を変えた。

「魔風戦士<sup>まふうせんし</sup>ウィンディア、ただいま登場ですっ！」

光を振り払い、ウィンディアを名乗った優奈はスパイダーを指差した。

鳶色から金へと変わった瞳が、変わらぬ真つ直ぐさで悪を射抜く。

「悪夢から生まれし闇の使者イメーシア！ この手で夢に還してあげます！」

「せ、先生が、変身した!？」

「……へ？」

教え子の声がすぐそばで上がり、ヒロインは目を丸くして振り返る。へたり込んだままの明がそこにいた。

「み、見ちゃったの!?　っていうか明くん、どうしてまだ逃げてないの!?!」

「足が動かないんですっ!」

言われて初めて、ウィンディアは少年の足首を封じる糸の存在に気付いた。

「ご、ごめんなさい!!　今外すね。すぐに終わらせるからどこかに隠れてて!」

両手を合わせて謝って、手刀に風をまとわせて糸を切断する。自由の身となった少年はヒロインを真っ直ぐ見つめた。

「あ、ありがとう……頑張つて。怪我しないでね優奈先生っ!」

「うんっ」

——少年が走り去るのと、蜘蛛の怪物が立ち直るのはほぼ同時だった。

『嗅ぎつけおったか魔風戦士めがっ!　このスパイダー様を舐めくさりおつて!』

コンクリート堀から体を引きはがした大蜘蛛スパイダー・イメージアが起き上がり、爪を掲げて優奈へと飛び掛かる。

「てえいやあっ!」

魔風戦士は四肢に風をまとわせ、先刻以上のキレをもつて蜘蛛の怪物に回し蹴りを入れる。毒牙が根元からへし折れた。

「ちゅっ、あむ、んぢゅるる……」

（んひゅ、乱暴にキスされてるのに……んはっ、びりびりきてるっ）  
唇を割り開き、舌が歯列を撫でてくる。抵抗が緩んだところへ、敏感な口腔へと舌が潜り込み、唾液を流し込まれた。

「ふ、んう、ふひゅう……」

押し戻そうとした舌を逆に吸われ、甘噛み<sup>あまが</sup>される。呼吸ができなくて思考に霞がかかる。  
（おくち、食べられちゃってる……やだ、怖い……っ！）  
くちゅ、ぷちゅる……。二人の唇から水音が溢れる。

耳の後ろが痺れる。目の前の少年に宿ったイメージの力が侵食してくる気配だ。何とか明を引きはがそうと腕を突っ張ると、あっさりと少年の体が離れた。

「ぷはっ」

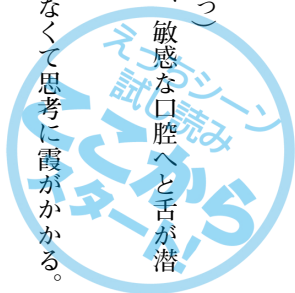
「ふはっ、はふーっ、はふ……こんなの、だめなんだよっ！」

少年が顔を離す。遠ざかる唇を、しかし優奈は目で追ってしまふ。淫少年は、見るものの心を蕩かせるような笑顔を浮かべた。

「優奈先生、そんなにキスがよかったんだ……」

「そ、そんなこと、ないっ。これは違うのっ」

口を押さえて慌てて否定する。毒に冒された味覚中枢は甘みを訴えていた。



「でも、おいしそうだったよ？」

間合いを詰められて髪を梳かれる。指使いが心地よくて、背筋が溶けて胎が煮える。

「バカなこと言わないで……っ、早く分離させない、とお……っ」

感度を強制的に引き上げられ、流されまいと使命感をもつて説得にあたる魔風戦士だが、少年は迷いなく思いつめた声を漏らした。

「僕、怖かったんだ。こんな時、父さんや母さんに守ってほしいけど、両方ともいない」母を亡くし、父は遠く——少年にとって一番近しい年長者は、優奈だった。

「だから、優奈先生を僕の恋人ママにするんだ」

「彰利さんは、そんなこと、ない……え、今、何て言ったの？」

明が耳元に唇を寄せて囁く。媚毒に苛まれた体は、それだけの刺激で勝手に脱力してしまふ。それでも、不穏な言葉は聞き逃せなかった。

「大丈夫だよ。やり方は、この力が教えてくれた」

「はうっ、でもこんなのだめ……わ、私ね、実は、好きな人が……んひうっ!？」

一世一代の告白で少年を諦めさせようとする——呼応するように腸壁が痺れて、節操のなさに泣きたくなるのを堪える。だが相手はすでに聞く耳を持っていない。

「関係ないよ。それが本当でも、僕のものにするんだから」

発情少女にまたがって、上体を起こした少年が乳房を捏ねまわす。そんな明の上気した

表情は、優奈の調教に夢中になる年上の恋人を彷彿とさせた。

（あ、やっぱり彼に似てる……じゃなくって！）

熟れた爆乳は、教え込まれた悦楽を思い出して熱く染まっていく。教え子の人差し指が、ブラウスを押し上げる姫イチゴをきゅつと摘んで——プツリ。

「んひっ!? 言うこと聞いてっつてばっ。私の体は、あの人にい……あおおおんっ!?」

一瞬の痛みの後に、異変は訪れた。押しのけようと目が腕が、電流を流されたようにビクンを震え、刺激に耐えようと無意識に指を丸める。

豊乳の内側で張り詰めていた熱い性感が、ものすごい勢いで循環を始める感触。毛細血管や乳腺を駆け巡るドロドロとしたものが、快楽神経を絶え間なく擦りたて、熱量を増しながら出口を求めて荒れ狂う。

むくっ、ビチ、ビチチィッ!

「はひっ、何これえっ!? おっぱい、爆発しちゃう……っ、明くん、怖いよお……っ!」  
布地を突き破らんばかりにしこりきった乳首が、痛いくらいに気持ちいい。内側から熱した鉄杭に貫かれるような、正体不明の疼きが恐怖を呼ぶ。

それに対して見下ろす魔少年は、優奈の体が一番求めるものをくれた。

「何も怖くないよ優奈ママ? これは僕の願いを叶えてくれる知恵と力なんだから、ね!」  
ブラウスの上から右の乳首に歯を、左の乳首に爪を立て、急激にしごきあげる。瞬間、

ぶびゆるるる、ぶちゅつ、ずりゅうううつ！

「ひゃひっ!? 出る、おっぱいからあつ、でりゅう、でちやつておっきいの、くるううつ!」  
純白の布地を突き破つて、より白い乳液が勢いよく迸<sup>ほとばし</sup>った。敏感な牝突起を熱い流体に内側から擦られて、制服ヒロインの意識は灼熱の絶頂に打ち上げられた。

「そんつ、なあ、母乳出ちやつてる……っ！ わたし、まだ明くんのママじゃないのにい……」

「これからママになればいいんだよ、先生……すつごく甘くて、おいしいよ？ ほら、もつと飲ませてよ、んくう……」

「はひっ、あへあ、あきらくうん……っ」

噴乳<sup>ぼつき</sup>勃起を交互に吸いたてられ、そのたびに脳髓に鋭い快感が突き刺さる。

自分の体の異常に戸惑いながらも、教え子に満足そうな笑顔で求められると、胸の奥が満たされてしまう優奈だった。

「脱がすよ、優奈先生。いいよね、だって先生はもう僕の恋人ママなんだ」

「……っ、こら、やめてっばあ」

（明くんの目、本気だ……イメーシアの目じゃなくって、本当に私を求めてる。でも、私には彼が……っ！）

観月優奈には恋人がいる。学生の優奈はまだ妊娠するわけにいけないため、男の趣味も

兼ねて尻肉を捧げ、牡に屈服する牝の悦びを教え込まれた。

だから——流されてはいけないのに、媚毒と愛撫の前に屈する自分を想像できてしまう。  
(体に力、入らないから……っ、あの人よりたくさんイカされちゃう……っ？ あ、あの人を裏切って、明くんにいっぱい……っ)

優奈は身をよじらせながら、ブラウスのボタンがひとつひとつ外されていくのを見ていた。それが、抵抗なのか期待なのか、自分でも分からなくなっていく。

「夢にまで見た、先生のおっぱいだ……」

「だめなのっ。明くんの気持ちは嬉しいけど、こういうのよくないんだから……っ」

ブラウスとブレザーが押し広げられ、汗と乳液にまみれた肌が外気にさらされた。少年の視線が乳肌を舐めまわす。直接触れられていないのに、むず痒さを覚えて体を揺すると、上を向いても形の崩れない美巨乳が遅れて震えた。

本来は白く静脈の浮いた乳房は情欲で赤く染まり、姬突起は細かな皺が伸びきるほどに乳輪ごと勃ち上がっている。さらにその先端はまだ噴き足りないのか白濁がぼつぽつと滲み出て、内側から快楽で溶け爛れそう<sup>ただ</sup>だ。

「……きれいです、先生」

「し、知らないよおっ」

まるで年下の恋人と愛し合っているような、甘いやり取りと背徳感に心が躍ってしまう。



見透かすように、少年が笑った。

「先生も、楽しんでくれて嬉しい。でも……僕はまだまだ、満足してないよ？」

明が爪を擦り合わせる音を合図に、部屋の外で何かの気配が動いた。

「だ、誰っ？ 明くん、何をしたの!？」

「僕の力にはこんな使い方もあるんだ。さつきマンション全体に糸を放っておいたから」ガチャ、と扉が開かれる。明と同年らしき男子たちが、虚ろな表情で部屋へと入り込んできた。ベッドで睦み合う二人を入れて十二人。部屋がだいぶ狭く感じられた。まだ部屋の外に溢れている気配も含めれば二十人は下らないだろう。

「明、本当にこの人がウィンディアなのかよ」「ウィンディアをガールフレンドにしたんだって」「家庭教師と今から結婚するなんて、すげえよ明」

口々に抑揚に欠けた賛辞を浴びせ、少年たちが絶頂少女に視線を集中させる。

「ひっ!? な、なんでっ!? け、結婚っ!？」

優奈は力の入らない腕で、ブレザーを抱え込むように自分の胸を隠す。明に見られるだけならまだしも、関係ない男子にまで見られるのは抵抗があった。

「先生、隠さないで。僕の恋人ママをみんなに自慢したいんだ」

「そんなんっ! だめ、明くん、許して……っ!」

欲望がアンバランスに肥大化したためか、それとも元々の性癖なのか。少年は恋人の裸

恥丘を突き出すようにベンチからずり落ちそうになるレオタードヒロインの、菊孔を少年の指が捉える。細い指に腸孔を押し広げられる感覚に、ウィンディアは腰を跳ねさせた。「あひ、んあう、また、きちゃうつ、おしりは、弱いのお……んひゅいっ」  
れるるう……っ。明の舌が秘裂をかき分けて膣内に潜り込む。裏門をほじられ、直腸がわななく。体内で跳ね回る異物が、両胸を貪る搾乳責めが、掌の中で躍るペニスの感触が、全身の神経を燃え立たせ、絶頂へと導いた。

「んはっ、うんっ、はひいっ！」

ジュプツ、ぷびゆるるるるっ！ プシャアアア……。

町内に響き渡る嬌声きょうせいを上げて、共有ヒロインはがくがくと震えた。乳房の性感神経を内側から擦りあげる牝ミルクと、掌をたっぷり汚す牝ミルクの熱さが全身を弛緩させていく。とぷとぷと、愛蜜が溢れてベンチに円を描く。

（人が来るかもしれないのに、みんなに見られておっきい声出しちゃったあ……ひっ!!）

ためたう思考が不意に明瞭さを取り戻す。だがそれはこの状況を拒むものではなかった。

「明くん、お、お願い、離れてっ」

「え？」

呆けた顔で見上げてくる恋人少年に、むずむずとこみあげてくるものが内圧に押されて

——びゆるつ、ちよろろろ……。

「うわっ。わぷっ、先生え……」

「ひあつ、止まらないい。ごめんなさい、ごめんなさいっ、みんな、見ないでえっ！」

謝りながらも、緩んだ尿孔から漏れる小水を止められずに明の顔に浴びせかけてしまう。アヌスに指を咥えこんだまま、黄色く透き通った尿に弧を描かせる姿は、ヒロインのプライドを粉々に打ち砕いた。

「へう、ううう……明くん……」

やがて小便を出しきって、陰唇をひくつかせた優奈は、恥ずかしくて情けなくて、目尻に涙を浮かべた。死んでしまいたいほど恥ずかしいのが、かえって心地よくすらあった。

「あはは、あっちこっちお漏らしして。しかたないなあ」

「えう……？」

優しく声をかけられて顔を上げた、粗相ヒロインの涙がぬぐわれる。

「あ、ハンカチ勝手に借りてるよ。さっき制服から出しちゃった」

「私じゃなくって、明くんの顔を拭こうよお……私、汚しちゃったもん……」

こんな状況なのに、ちよつとの優しさが嬉しくて、申し訳なくてしかたない。

「先生もドロドロだからおあいこだよ。でも、そう思うんだったら」

自分が汚してしまった顔が近づいてくる。何を求めているのか、優奈には分かってしま

った。そして分かってしまった以上は、叶えなくてはいけない。

「う、うん。……ちゅっ、うぷ……っ」

舌を伸ばし、少年の顔を——付着した小水を、舐め取る。汚くて屈辱的なのに、うっとりと目を閉じる明を見つめると、満足感が湧き上がる。

「んう……しよっぱあい。全部舐め舐めたよ、明くん」

「よくできました。ねえ先生、さっきから合わせて何回イッちゃった？」

いたずらっぽく問われて、汚辱乙女は唇を引き結ぶ。達した回数など覚えていない。明もまた、本当に回数を知っていたわけではないようだった。

「でも先生ってば、お尻がこんなにほぐれてるよ？ お尻でイッちゃう変態さんなんだ？」

「んあっ、んほおお……っ！ 今は、だめ……っ！」

ぶちゅっ、ちゅぽう……。ぷちゅるるっ

菊華を荒らす指が三本に増える。乱暴な拡張で皺が伸びきり、腸内に空気が流れ込む。腸液が漏れ、僅かに残っていた粗相汁も溢れてしまった。

「んひゅっ、分かんないよお、さっきからずつとふわふわしてりゅ、んぷう」

空いた手で乳首も摘まれて、抵抗する力を奪われる。それつの回らない口で答えたら唇を塞がれたので、反射的に舌を絡める。

（あ……今、キスしてるだけで、イキそお……）

快感に侵食されて、感覚の麻痺が進む。何が異常で、何が恥ずかしいことか——考える前に、このぬるま湯に浸っていたい。

「最上ー。また一人占めかよー」

「あは、ごめん。でも今からメイスイイベントなんだ、ちょっと待ってて」

男子の一人が声を上げる。明が笑って指を鳴らすと、その男子は糸の切れた人形のようにふらりと倒れた。誰も、それを一顧だにしない。優奈もまた、事象を認識できずにいる。何より、恋人に乳房を揉まれることが最優先だ。

「こんなにパンパンに張り詰めて……僕も、そうなんだ」

「んうっ、はふ……んえ？」

少年は半ズボンの金具を樂しげに外す。乳房から垂れ流される甘いミルク臭と、両手にまとわりついた薄く青い精臭、そして汗の芳香に重たい牡の発情臭が混じり合った。

「見てください、先生……ずっとこんなになってて、僕苦しいよお」

「ん、う……えっ、ええっ!？」

優奈が目にしたのは、凶悪に隆起した剛直だった。儀式用の武器に施されたエングレービングのように、血管とも筋肉ともつかない凹凸が肉竿を彩る。ただの生殖器ではない。女を泣かせるための凶器だ。明が優奈の手を引いて、極悪なシンボルへと導いていく。

グチュリ。

「そん、なの……っ、は、入らないよっ。私、知らないもんっ!!」

小さな少年のペニスなら、抵抗なく触れることができた。だが、明のものは次元が違う。怪物の力で変質してしまったのだろう、成人男性どころか人類の粹もはみ出している。

恐怖とは裏腹に熱さを感じた女体は、蕩けた処女孔を勝手に蠢かせてしまっていた。

「大丈夫だよ。先生の体が傷つかないように作り変えてあげるから……みんなも見て」

倒れた男子を除く二十一人が二人を囲む。牡に所有される牝の本能が、抵抗の意志を奪う。

「先生。いっぱいイッてね」

「ふ、わぁ……っ、やつ、やだあっ、お願いゆるして……っ」

しどけなくベンチに身を投げ出すレオタード少女に、巨根少年がのし掛かる。少年の体軀に不釣り合いな肉槍が、陰唇に狙いを定め、浅く密着する。

「んくっ!! 明くん、待って、こんなのやつぱり……っ、私、本当に好きな……あぁっ!」

触れあった粘膜から電流が駆け上る。恐怖によつて蘇った理性がストップをかけるが、本能を肥大化させられた少年の耳には届かない。

ずぶぶ……ぶちぶちい、ジュブブブブブッ!

「ふぁひっ、あぎ……っ、んひいひいひいっ!!」

充分に濡れてほぐれた蜜洞に、熱く猛々しい塊が押し入ってくる。抵抗の膜をあつさりと打ち破り、切っ先は最奥へと届き、さらに押し上げた。

「んぐうつ！ ……ふひ、はひやえ……」

処女を捧げた衝撃に、白目を剥いて舌を突き出す。今まで迎えたアクメを足し合わせたよりも強烈な激感に、なすすべなく流される。そんな恋人家庭教師に、魔少年が囁きかけた。  
「ほら。僕たちとうとうひとつになれたよ、先生……気分はどう？」

「う……んっ！」

涙を浮かべ、優奈は告げる。全身がバラバラになるほどの衝撃に、呼吸を乱しながら。  
「気持ち、いいの……っ、でも、こんなの……ひはっ、ひどいんからねえっ、わた、わたしじゃなきゃ、やつちやダメなんだからあ」

歓喜を滲ませ、溢れさせて、処女喪失の悦びを伝えた。膣肉が侵入してきた犠牲器を歓待し、絡みついて奥へと誘う。ドーナツ状の子宮口が小刻みに小突かれ、ほぐされる。息ができないほどに肢体を満たされて、多幸福感が溢れ出す。

「お姉さん、凄い顔……」

「っ、ふあわっ!? っ、やだっ、やつぱりみないで……あひいんっ！」

誰かが呟いた声に、自分がたくさんの少年に見られていることを思い出し、狂乱する。視線を意識するたびに体に電流が走って、全身の筋肉がわななく。

「は……ひあ……!!」

その動きで胎内が肉棒にかき混ぜられ、子宮を深々と抉られ、思考が真っ白に染まった。

この続きは製品版をご購入の上、  
お楽しみください。

編集・発行

**株式会社キルタイムコミュニケーション**

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

**<http://ktcom.jp/>**